第86回 憲法を考える映画の会

日本人はなぜ戦争へと向かったのか
―“熱狂”はこうして作られた―
手元資料

■日時：2026年2月8日（日）
13：30～16：30
■会場：文京区民センター 3A会議室
（地下鉄春日駅・後楽園駅）

■プログラム
13:30～13:40　上映作品の紹介
13:40～14:30　参考上映
『日本人はなぜ戦争へ向かったのか
“熱狂”はこうして作られた』
（49分）
14:30～15:00　トークシェア
15:10～16:30　参考上映
『映像の世紀 第4集 ヒトラーの野望
人々は民族の復興を掲げたナチス・ドイツ
に未来を託した』
（74分）

■入場無料（資料代、会場費の協力をお願いします）

■手元資料 目次

資料❶　テレビ番組「日本人はなぜ戦争へと向かったのか」について+【映像を見て考えたいこと】 P.2
資料❷　作品解説「同じ過ちを繰り返す日本―戦争・原発事故・コロナ危機」水島朝穂先生 P.3～4
資料❸　作品解説「プロパガンダ映像をどう扱うか―術中に嵌まる危うさ」石田勇治先生 P.5
資料❹　戦争に至る日本と世界 年表 P.6
資料❺　論説・書籍紹介『人々の社会戦争　日本はなぜ戦争への道を歩んだのか』 P.7
資料❻　「映像の世紀」シリーズについて（バックナンバー一覧） P.8～9
資料❼　第85回 憲法を考える映画の会（2025/12/7）『レーン・宮沢事件』報告および参加者感想から P.10~11
資料❽　憲法を考える映画の会 あとおいニュース　P.12

憲法を考える映画の会

〒185-0024
東京都国分寺市泉町3-5-6-303
TEL & FAX：042-406-0502
HP：http://kenpou-eiga.com/
E-mail：hanasaki33@me.com

資料❶　テレビ番組「日本人はなぜ戦争へと向かったのか」について
【映像を見て考えたいこと】

【作品解説】

「日本人はなぜ戦争へと向かったのか 第３回
『“熱狂”はこうして作られた』

あなたは、日本が再び戦争をする日が来ると思いますか?
日本が戦争へと突き進む中で、新聞やラジオはどのような役割を果たしたのか。戦争という時流に乗ったメディア、メディアの影響でナショナリズムに熱狂していく民衆、そして庶民の支持を得ようと自らの言動にしばられていく政府･軍の幹部たち。その三者によって作られた世論の熱狂とは何だったのか。
■NHKスペシャル「日本人はなぜ戦争へ向かったのか
第３回“熱狂”はこうして作られた」2011年2月27日放送

「映像の世紀 第4集 ヒトラーの野望
人々は民族の復興を掲げたナチス･ドイツに未来を託した」

20世紀、最もたくみに映像を利用して大衆の心をとらえた権力者ヒトラー。国家がプロパガンダ映画を使い世論をリードした1930年代。ナチスが自ら制作した映像を通して、ヒトラーが熱狂的支持を得た背景や戦術を探る。大恐慌の再建に苦しむアメリカ、資本主義社会への優越性を宣言するソ連、満州国の建設に踏み出した日本の姿を織り込みながら世界を戦争に巻き込むナチスドイツの狂気への道を映し出す。
■NHKスペシャル「映像の世紀 第4集 ヒトラーの野望
人々は民族の復興を掲げたナチス･ドイツに未来を託した」1995年６月17日放送
（作品の解説はDVDジャケットから引用）

【映像を見て考えたいこと】

昨年2025年は､戦後80年、昭和100年ということで、8月や12月には「戦争を語り伝える」といったテーマでの集まりや映画会など企画も活発に行われました。
しかし、戦争の悲惨さを語り伝えると言うことはあっても「なぜそのような戦争が起きたか」「戦争を止めることは出来なかったか」をきちんと語り伝えるようなものは、あまり多くなかったように思います。
戦争の悲惨さを知る世代でも、歴史学者は別として、戦争を自分たちの問題と考えて、「どうして止めることが出来なかったのか」をきちんと反省して、次の世代にはっきり伝えることのできる人は多くなかった、だからこそ今、戦争に向けての同じようなことが繰り返されようとしていると言えるのではないでしょうか。

「もはや戦前」「すでに戦中」とも言われることがあります。今は、第二次世界大戦前夜の1940年代、大恐慌以降の世界の、そして日本の政治、経済、社会の情況に似ていると言われます。
戦争に向かって行く危険性はいくつもあげることができます。
（１）憲法をなし崩しにして「戦争できる国」から、さらに「戦争を仕掛ける国」へ。2015年の安保法制、集団的自衛権を認めてから戦争の準備が着々と進められています。敵地直接攻撃をも意図したミサイルの配備や敵を想定し、他の国との合同軍事訓練を繰り返すといった実質的な戦争準備が進めらっれていること、軍拡は留まることがありません。
（２）自民党などが進める改憲の眼目は自衛隊を正式な軍隊とすることにあります。彼らの言う「普通の国」は軍隊がやりたいことを最優先にする国。そもそも軍隊は敵を作りそれに反対するものを抑え込みます。「スパイ防止法」など戦争をするために都合の良い法整備も次々とどんどんと進められていきます。
（３）そうした動きに対して、国民も無関心であったりあまり考えずに「戦争になってもしょうがない」と言うような空気が蔓延しているように思います。

↑NHKスペシャル「日本人はなぜ戦争へ向かったのか
第3回“熱狂”はこうして作られた」より

↑NHKスペシャル「映像の世紀 第4集 ヒトラーの野望
人々は民族の復興を掲げたナチス･ドイツに未来を託した」より

↗　小競り合いのようなものでも一度衝突が起これば、一気に燃え上がってしまって「戦争はダメだ」などと言えば、非国民だ､戦わないのは日本人とはいえないと排斥される、そんな風になりかねない恐怖があります。ものを考えない、自分の耳に心地よいことしか受け入れない風潮ができあがってしまっているように思えます。

そこで私たちは、戦争に向かう時期、人々はどんな風に戦争を受け止めていたかを知りたいと思いました。NHKスペシャルでかつて放送した『日本人はなぜ戦争に向かったのか』のシリーズを見て、戦争に向かう政治、社会がどのようなものであるか、その中で、人々はどのようにそのような戦争に向かう道を歩むことに同調していったかを見直そうと考えました。さらに『映像の世紀 第4集 ヒトラーの野望』を見て､その時代、世界の人々がどのように感じ取っていたかを知りたいと思いました。

分断と排除を進め、力にまかせた争いや戦いに誘い込む政治が世界の各地で繰り広げられています。人類が今まで築いてきた民主主義と平和への志向、そして人権が次々と壊されています。
そうした動きを熱烈に支持し賞賛する人々がたくさんいるのも事実です。
それらを動かしているのは何か、戦争に至る世界の歴史を描いた二つのドキュメンタリー番組を見て、考えていきたいと思います。

私たちが2月8日を映画会の日と決め、テーマ･プログラムを決めた後、この日を衆議院選挙の日にすることがきまりました。そして情勢は立候補者の9割近くが何らかの改憲を是とする政党によって占められています。
選挙の後、改憲の動きは加速されるでしょう。そして今までもそうであったようになりふり構わず、まっとうな議論も無しにそれらは進められるでしょうか。戦争に反対したいと思っている人と考えを共にし、一人一人よく考え、それを力にしていきたいと考えます。

資料❷　作品解説「同じ過ちを繰り返す日本―戦争・原発事故・コロナ危機」水島朝穂先生（１）

日本人はなぜ戦争へと向かったのか
第1回　“外交敗戦”孤立への道　2011年1月9日
第2回　「巨大組織“陸軍”暴走のメカニズム 2011年1月16日
第3回　“熱狂”はこうして作られた　2011年2月27日
第4回　開戦・リーダーたちの迷走　2011年3月6日
戦中編　果てしなき戦線拡大の悲劇　2011年8月11日

第1回～第4回：各49分、戦中編:58分
制作統括：西脇順一郎ほか
ディレクター：宮川徹志ほか

【「3.11」直前の放送】
この作品は放送された時点ですべて視聴していた。
100人を超える政治家や陸海軍の肉声テープを使い、「今こそ知るべき過去がある」というトーンで、日米戦争に向かうプロセスに拘わった、太平洋開戦70周年の節目の作品である。2011年正月の最初の日曜夜9時30分から第1回の放送が始まり、第4回目のが終わったのは3月6日だった。その5日後に東関東大震災が起きる。今回この原稿を書くために9年ぶりにDVDで全巻を視聴してみて、そこに貫かれているテーマが、「3.11」や2020年現下で問われるこの国の政治や社会の有り様と実によく似ていることに驚いた。
戦争と「複合被災」（「原発震災」）と「コロナ禍」とは同じではないが、リーダーが決断できず、結論を先送りする傾向と自己保身の巨大組織、現実と向き合わず、自分の意図のとおりに進むという根拠のない楽観主義、横並び指向のメディア等々、79年前とは思えない新鮮なしかし深刻な発見があった。

【外交なき孤立と「軍」の肥大化】
第１回は、日本の国際的孤立への道を可視化していく。１９３３年の国際連盟脱退と「日独防共協定」締結がターニングポイントとなるのだが、番組では、当初は連盟に残る方針をとっていたのに、日本政府が国内世論を優先させて、「満州」をめぐる英国の妥協案を拒否し、列強の以降を読み間違って連盟脱退・孤立へ向かう過程が手際よく描かれている。
国際連盟脱退の真相はこの回の白眉であるが、松岡洋右は何とか頬被りしてごまかせると思っていた節がある。満州だけなら日本だけではないから、大国の支持を得られるという楽観論であった。そして根っこには、軍による外交への介入、そして陸軍と外務省の二重外交があった。その間、７人の首相が交代した政党内の核の弱体化も背景にある。有田八郎（外相）の意図は、対ソ防共で蒋介石と結んで孤立を回避しようとするものだったが、これは完全に裏目に出る。大島浩（独駐在武官）はヒトラーと接近をはかり、吉田茂（駐英大使）は英国との連携を模索する。ちぐはぐな日本外交はドイツとの接近のみが突出し、１９３６年に日独防共協定が成立し、ドイツ以外のすべての国を敵に回すことに。かくして１９３７年７月、日中全面戦争が始まる。１９４０年９月の「日独伊三国同盟」から太平洋戦争に至る過程はまさに「外交敗戦」と形容される。そこには、様々な「誤算の連鎖」があった。番組は特にそれも強く印象づける。

第２回は巨大組織、陸軍のいわば解剖学といえる。100人を超える関係者の肉声テープから、550万陸軍の誤算の積み重ねが描かれていく。
何よりも「一夕会」という陸士16期の40人ほどのエリートが陸軍の人事を握り、やがて皇道派と統制派に分かれて派閥抗争を展開。皇道派将校による永田鉄山軍務局長暗殺事件をきっかけに、「統制の不在」から太平洋戦争に向かう過程がドラマチックに描写される。
番組では「天津軍の暴走」として、支那駐屯軍（司令部・天津）の河辺正三旅団長と牟田口廉也歩兵第一連隊長のコンビが盧溝橋事件を起こしたことに触れつつ、後にこの二人がインパール作戦時のビルマ方面軍司令官と隷下の第15軍司令官として無謀かつ強引な作戦を展開した「日本陸軍最悪のコンビ」となることを示唆する。
この回で重視されたのは、「組織の肥大化」という視点である。20を超える司令官・参謀長ポストが新設され、東京から大臣をやった人物が着任する。想定されているのは、寺内寿一陸軍大臣の南方軍司令官（減衰ポスト）就任だろう。武藤章軍務局長はこれを縮小しようとしたが、現地軍の反対にあい、組織の論理が優先された。1941年10月18日の東條英機内閣の成立は、「一夕会」メンバーがついにトップを獲得したことを意味する。かくて戦争への道は加速される。

【熱狂の演出と指導者の迷走】
「熱狂」を意識的に演出したメディアの役割に着目する第３回では、多くの記者たちの証言を通じて、戦争になると新聞の発行部数が増え、新しい読者が生まれるというメディアの病理と生理が明らかにされる。
各紙の号外競争が始まり、満州事変すら１つの「イベント」として読者数を増やしていく。当初は慎重な論調だった『朝日新聞』に不買運動が起こり、けっきょく「国益」重視に変わる。『信濃毎日新聞』も、桐生悠々の社説「関東防空大演習を嗤う」に対する在郷軍人会の圧力と不買運動により、桐生は退社に追い込まれる。
この会では、満州事変以降、軍とメディアの癒着が進み、首相官邸でメディア幹部との食事会が開かれたことも明らかにされる。メディア幹部と頻繁に会食を繰り返す安倍政権の手法が想起される。なお、ナチスは「ラジオは国家の意思を運ぶ」としてその活用を進めたが、NHKはこれに学び、政治家や軍人の演説に人々の歓声（歓呼）を巧みに入れ込み、戦意昂揚を図った。NHKにとっては身を切るテーマであろう。

第4回はリーダーの迷走にポイントを絞る。日米には総合力で80倍の差があったとされているが、その米国となぜ戦争したのか。全会一致制の大本営政府連絡会議では、陸軍が北進論（対ソ連）、海軍が南進論（「自存自衛」）を主張し、決定は先送りされていく。
番組では、首相はじめ陸海軍首脳や企画院総裁など、それぞれのアクターに着目しながら、中国からの撤兵という米国の要求に譲歩するか、それとも南方資源の独自調達を図るか、2つしかない選択肢の中で迷走する様を追う。海軍は米国との戦争に勝ち目無しと見ていたし、陸軍の現地司令官たちも戦争回避を求め、撤兵やむなしに傾斜していた。にもかかわらず、中国ですでに20万人が戦死しているという「死者への負債」（ジョン・ダワー）から、撤兵へのハードルは高まる。「人が死ねば死ぬほど、兵は退けなくなる。リーダーは決して死者を見捨てることは許されないから、この「死者への負債」はあらゆる時代に起きている」という言葉は教訓的である。
1941年9月の連絡会議では、武藤軍務局長が、「日米開戦はやめてくれと海軍が言ってくれれば」と希望するが、海軍は沈黙を守る。一方、及川古志郎海軍大臣は、鈴木貞一企画院総裁のところへいき、御前会議前に日米戦争はできないと上奏するように頼む。連絡会議では、近衛首相とルーズベルト大統領との太平洋上でのトップ会談で撤兵をのみ、禁輸をとかせてから天皇に「開戦はしない」といわせて陸軍を抑えるという暗黙の空気が生まれる。だが、10月12日に近衛首相が私邸に陸海軍大臣を集め4時間議論するも、及川は逃げて近衛に一任。交渉をいう近衛に東條が反対して、結局何もきまらないまま、4日後に近衛内閣は総辞職して東條内閣が発足する。「判断をすべて先送りし、選択肢をすべて失った上での決意無き開戦」となった。
「総理大臣が2，3人殺されるつもりでやれば、戦争回避はできただろうが、それだけの人がいなかった」と保科善四郎海軍省兵務局長は後に語っている。「独裁的な政治ではなかったので戦争は回避できなかった」とは佐藤賢了軍務局長の言葉。遺族は佐藤が開戦に「けっこう慎重だった」と語る。松平定知キャスターの本篇のまとめの言葉は、（１）戦略を持たない外交。（２）目的を見失っていた陸軍の組織、（３）大衆迎合と戦争宣伝のメディア、（4）重要な案件を先送りするリーダーたち、（５）果てしなき戦線拡大の悲劇、である。すべてが戦争の愚かさに気づいていたのに、戦争の道をたどった事実の重さ、少なくともあの時、なぜ私たちは戦争への道を選んだのかを考えることをやめてはいけない」という松平の語りに加古隆の重厚な音楽が重なり、エンドロールとなる。　（次ページへ続く）

【戦争と利権と】

戦中編「果てしなき戦線拡大の悲劇」は、全4回の本篇続編として、その年の「終戦記念日」に放映された。

番組では、本篇のまとめの5点のうち、戦線拡大の背後にある事実を深掘りしていく。

特に1942年2月の陸海軍の課長級会議（山王ホテル）は興味深い。イラストを使い、戦線拡大をめぐる課長たちのやり取りを再現する。両論併記のまま、ズルズルと戦線拡大に引きずられるとともに、「想定外」の対処を考えず、最悪のシナリオから目を背け続けた。そして、戦線の拡大の背景に、南方資源をめぐる軍と経済界の利権が生まれていたことを伝える。例えば、当初インドネシアとマレー半島が侵攻範囲だったのに、補給が届きにくいニューカレドニアまで侵攻したのは、経済界のニッケル獲得が狙いだったという。本来の戦争目的が曖昧になり、南方占領地に実に480社の日本企業が進出した。戦線拡大を「ビジネスチャンス」に結びつけようとしたのである。占領地が広がるほどに、軍と企業の利権が深まっていくことを、当時の商工省史料や関係証言により裏付けていく。海軍は、ニューギニア、ポートモレスビー、陸軍はビルマ北部（インパール）へ。利権の拡張が軍の戦線拡大の背景にあった。戦争の主導権をめぐる陸海軍の争いは戦略物資の奪い合いという側面を持っていた。

【いつも兵士が犠牲に】

1942年5月のミッドウェー作戦は、陸軍の支援無しの海軍の暴走だった。山本五十六大将は、開戦後半年で講和のチャンスをつかめず、「われわれは切り死にを承知でミッドウェーに向かった」という。この「戦中編」では、死地に追い込まれた兵士たちの叫びも拾っている。

中でも注目されるのは、ガダルカナル戦の生き残りの言葉である。自分たちの一木支隊は実はミッドウェー島攻略に向けられる部隊だったが、ミッドウェー敗戦を誤魔化すために、ガダルカナルに転用されて全滅した、と。「白骨街道」のインパール作戦の生き残りは、「早く死ねば日本に帰れる。生きていれば遅れる」と語る。利権拡張による戦線拡大の象徴的な事例がニューギニア島への上陸作戦だった。ここで参加兵力20万人中18万人が戦死した。「ビルマの地獄、死んで帰れぬニューギニア」と兵士たちが自虐的に語る戦場は、無謀な戦線拡大の結果だった。

【戦争から原発・コロナへ】

この作品は本篇＋戦中編を通じて、指導者が全体のプランを示すことができず、矛盾した要求を調整しないまま先送りするという指導部の機能不全、有事のさなかに目先の利益と組織優先を超えることができなかったセクショナリズム、そして、重大な事態に対応できない危機管理意識欠如が、松平キャスターの歯切れのいい、断定的口調によって浮き彫りにされる。「戦中編」が放映されたのは、「3.11」後、発の「8.15」の夜10時だった。まるで福島原発事故とその後の政治の迷走を見るかのような描き方で、放映当時、それが強く印象に残った。

この作品は、NHKのそれまでの戦争関連作品の中で「失敗の本質」的なアプローチが際立った作品といえる。それゆえ、問題意識が鋭くかつ明快な分、戦争の展開や個々の証言の評価などの点において議論の余地が無いではない。政治家や高級軍人の証言は、もちろん戦後かなりの時間が経過して成されたものであり、距離をとった評価が求められる。特に軍務局長をやった佐藤賢了。「東條の腰巾着」以上のべたつきのため「東條の納豆」と言われた人物だが、開戦直前、軍務課長として、空襲下で犠牲を増やすことにつながる防空法改正を主導した（拙著『検証　防空法』法律文化社、2014年参照）「（日米開戦に）結構慎重だった」という遺族の証言も、そのままは受けとれない。対米開戦に限定された評価であって、満州事変以降の日中戦争を含む戦争全体の中で位置づけることも必要だろう。

なお、前述した近衛私邸での陸海軍大臣の会談で、及川海軍大臣が「近衛一任」で逃げたという「通説」について、2009年8月9日放送のNHKスペシャル『日本海軍 400時間の証言』で扱われた海軍軍令部メンバーたちの秘密裡の会合（「海軍反省会」）の議論を検証して、その第66回海軍反省会で、及川の再評価説が出ていることを近年の研究が明らかにしている。　↗（「「Web歴史街道」2018年12月18日公開）。だが、いつものことだが、軍人たちの反省には、自己弁護と「次はもっと上手くやる」という傾きが感じられる。

この番組全体を通じて隔靴掻痒の感が残るのは、この戦争の初めから終わりまで、責任の所在が曖昧なまま原因と結果についての一応の結論が導かれていることだろう。

現在のコロナ危機に当たっても、政治指導者は科学的根拠に基づく明確な方針を打ち出せず、国民の生命・健康と経済生活に重大な影響を与える政策決定が迷走している。戦争、原発事故、コロナ危機と、まさに「同じ過ちを繰り返す日本」がここにある。そうした時に明確な問題意識と当事者たちの証言を積み重ねた本作品を全巻通じてみることによって、様々な今日的教訓と視点を得ることができるだろう。

【さらに学ぶ人のために】

吉田裕『**シリーズ日本近現代史⑥　アジア・太平洋戦争**』（岩波新書2007年）「大東亜戦争」史観に対峙される、史料裏付けが恭子で問題意識鮮明の決定版。

水島朝穂『**戦争とたたかう―憲法学者久田栄正のルソン戦体験**』（岩波書店、2013年）ルソン島の千条から静観した体験を平和憲法につなげる一憲法学者の記録。

NHKスペシャル取材班編著『**日本人はなぜ戦争へと向かったか（上・中・戦中編）**』（NHK出版、2011年）。番組全体を活字で再確認できるとともに、「なぜ」に丁寧に答える書。

（以上、日本平和学会編『**戦争と平和を考えるNHKドキュメンタリー**』より　引用させていただきました。）

水島 朝穂：法学者。専門は、憲法学・法政策論・平和論。特に、日本とドイツを中心に憲法の平和主義、平和の法政策論の研究を行う。早稲田大学法学学術院名誉教授。

水島朝穂『**戦争とたたかう―憲法学者久田栄正のルソン戦体験**』

軍隊内務班での人間性否定に毅然と抵抗し、フィリピンの凄惨な戦場でも戦争に抗い続けた久田栄正。戦後は自らの戦場体験を礎に平和憲法と共に生きた老憲法学者の稀有な従軍体験を、「戦争を知らない世代」の憲法学者が詳細に聞き取った。膨大な資料を探索し、久田証言を客観的に検証し、アジア太平洋戦争の歴史に位置付けた感動の一冊。

日本人はなぜ戦争へと向かったのか　上

［編著］NHK取材班　発売日　2011年02月25日　NHK出版

いま明らかになる戦争への「本当の」道のり

太平洋戦争開戦から70年、いま東京裁判に関する膨大な証言や日記が公開されつつある。そこから見えてきたのは、これまで言われてきたような単純な図式ではない、複雑で予測不可能な道のりだった。4回シリーズを2巻にわけ、上巻では「外交」「陸軍」の2テーマを収載。加藤陽子氏による特別寄稿掲載。

日本人はなぜ戦争へと向かったのか　下

［編著］NHK取材班　発売日　2011年06月25日
NHK出版
1941年日本にはどんな選択肢があったのか
太平洋戦争開戦から70年が経過し、開戦にかかわった多くの人物による日記や証言が公開されつつある。いったい何が日本人を太平洋戦争へと向かわせたのか。大きな反響を呼んだシリーズ番組の3・4回を収める下巻では、「メディアと民衆」「リーダーたちの非決定」に焦点を当て、最新の研究と資料から「開戦までの道のり」の詳細を検証する。

資料❸　作品解説「プロパガンダ映像をどう扱うか―術中に嵌まる危うさ」石田勇治先生

「映像の世紀第4集 ヒトラーの野望　人々は民族の復興を掲げたナチス・ドイツに未来を託した」1995年6月17日／74分／制作統括：河本哲也他、ディレクター:内山達／1995年毎日芸術賞、同第22回放送文化賞（個人・グループ部門）

【世界恐慌から世界戦争へ 1930年代の世界情勢】

本番組は、第一次世界大戦の敗戦国ドイツに現れた独裁者のヒトラーが、大恐慌にうちひしがれた国民に「民族」としての誇りを与え、やがてドイツと世界を戦争の渦へ巻き込んでいく過程を描いている。

前半の見どころは、ヒトラーの演説技法を読み解く場面である。「同じ言葉を繰り返す」「ざわめきも収まり、人々が進んで自分の話を聞こうとするようになるまで辛抱強く待つ」―いずれもよく知られたものだが、熱狂する聴衆、万雷の喝采とどよめき、臨場感溢れる映像を通して見る希代の演説家の姿に、思わず巻き込まれる現代の視聴者も少なくないだろう。

ここでヒトラーはナチ党（国民社会主義ドイツ労働者党）の制服を着用している。少し前に首相ヒトラーが初めて行ったスタジオからのラジオ演説の反響が芳しくなく、それを挽回するべく、党員で埋め尽くされた「ナチ党御用達」の大ホール、有名なスポーツ宮殿で満を持して行われたのがこの演説（1933年2月10日）である。その映像は46分のプロパガンダ映画「ドイツ国民への呼びかけ」に編集され、ヒトラー崇拝確立に向けて活用された。

後半では、ユダヤ商店ボイコットに始まるユダヤ人迫害の様子と、ヒトラーの領土拡大の野望が一歩一歩現実のものとなっていく過程が英仏医の動向とともに映し出される。

ミュンヘン会談（1938年9月）ではチェコスロバキアを犠牲にして「欧州平和の維持」がはかられたが、結局ヒトラーの東方拡大の野望を拒むことはできなかった。「平和への最後の努力は水泡に帰した。痛恨の極みである」。ドイツ軍のポーランド侵攻を見たイギリス首相チェンバレンは、ラジオ放送でそう述べて対独宣戦を布告（1939年9月3日）した。

米日西の映像も映される。サンフランシスコのゼネストで共産主義者が一斉検挙される姿、満州国執政溥儀のスピーチと南京大虐殺の惨状。スペイン内戦で活躍した国際義勇軍とゲルニカの爆撃。そしてピカソの怒り。

【プロパガンダの再現?「アウトバーン神話」】

番組は終盤で、高揚する大衆の姿を映しながら「（ヒトラーは）人々の熱狂的支持で力を得た」とのべて、民意が独裁を生じさせていたことを強調している。だが自由な国政選挙におけるナチ党の得票率は最高で37%（1932年7月）にすぎない。ヒトラーが首相になる直近の国会選挙では33%に下落した。1933年に1月にヒトラー政権が発足するが、それは国会に多数の基盤のない少数政権だった。それでもヒトラーはこれを「国民総決起内閣」と呼び、共産党など反対派へのテロと大規模宣伝を組み合わせた国民統合キャンペーンを展開したのである。」

ナチの徹底したプロパガンダの影響は、戦後まで尾を引いた。神がかった抗しがたいヒトラーの残像は、なぜヒトラーを支持したのかと問いつめられた人々が口々に発した弁明によって再生産された。

番組ではアウトバーンに代表される公共事業が功を奏して失業問題が解決したとして、「ドイツ国民の間で、（それは）ヒトラーの奇跡といわれた」と述べている。だが「ヒトラーの奇跡」としてナチの宣伝そのものであった。番組で建設記録として紹介される映像がプロパガンダ映画であることに十分な注意が必要である。現在の歴史研究では、アウトバーンの建設が失業者減少に大きく貢献したという説はほぼ否定されている。むしろ女子就業者を家庭に戻す政策、夫婦共働きの禁止、労働奉仕制度と一般徴兵制の導入、そして再軍備の本格化が重要だった。

「宣伝の秘訣は、いかにも宣伝らしくでなく、相手にそうと気づかれないうちにどっぷりと浸らせてしまうことだ」。これは宣伝相ゲッペルスの言葉である。　↗

過去の事象を再構成する上でプロパガンダ映像の扱いには、現代の視聴者への影響を含めて、細心の注意が必要だ。最新鋭の技術を駆使し、実際に世論誘導・大衆操作に絶大な効力を発揮したナチ映像の場合、なおさらであろう。

【さらに学ぶ人のために】

石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』（講談社現代新書、2015年）

（以上、日本平和学会編『**戦争と平和を考えるNHKドキュメンタリー**』より引用させていただきました。）

石田 勇治：歴史学者。東京大学名誉教授。日本学術会議連携会員。専門はドイツ近現代史、ジェノサイド研究。

石田勇治『**ヒトラーとナチ・ドイツ**』
講談社現代新書、2015年

ヒトラーは、どのようにして大衆の支持を得て独裁者となったのか。安楽死殺害やホロコーストはいかにして行われたのか。その歴史を知るための入門書であり、決定版の書。ナチ体制は、単なる暴力的な専制統治ではなく、多くの国民を受益者・担い手とする「合意独裁」をめざした。最新研究をふまえて、未曾有の悪夢の時代を描く。（講談社現代新書）

戦争と平和を考えるNHKドキュメンタリー
日本平和学会編
2020年10月発行　法律文化社

平和研究・教育のための映像資料として重要なＮＨＫドキュメンタリーを厳選し、学術的知見を踏まえて概説。テーマを①２０世紀の世界、②冷戦、③アジア太平洋戦争、④日米関係の中の沖縄の現実、⑤原爆と原発事故の経験に絞り５０本以上の貴重な映像（番組）が伝える史実のなかの肉声や表情から、戦争と平和の実像を体感・想像し、「平和とは何か」をあらためて考える。

◆第Ⅰ部　映像の20世紀
Ⅰ－1　「映像と人間」の世紀の始まり
Ⅰ－2　世界戦争の悪夢
Ⅰ－3　大衆社会の狂騒と病理―資本主義の文化的矛盾
Ⅰ－4　プロパガンダ映像をどう扱うか―術中に嵌まる危うさ
Ⅰ－5　皆殺しの思想―人間の非人間化と機械化の臨界点
Ⅰ－6　独立運動を率いた3人の偉人たち
Ⅰ－7　冷戦の起源―権力政治とその犠牲者
Ⅰ－8　せめぎ合う戦争の恐怖と自由への渇望
Ⅰ－9　自由と民主主義の主体とは誰か
Ⅰ－10　民族自決の理念と幻想
Ⅰ－11　人類が初めて経験した未曽有の世界大戦
Ⅰ－12　資本主義というモンスターの誕生
Ⅰ－13　ナチ・ファシスト体制の戦争―映像と記憶をめぐる問題
Ⅰ－14　冷戦と権力の謀略―独善的「正義」の闇
Ⅰ－15　理想主義が現実の国際政治を動かすとき―68年の思想のグローバルな転移とその帰結
Ⅰ－16　あなたのワンカットは世界を平和に変えるのか

◆第Ⅱ部　破壊と分断の世界

◆第Ⅲ部　アジア太平洋戦争に向かう日本
◆第Ⅳ部　日米戦争と日米同盟―オキナワの現実
◆第Ⅴ部　原爆と人間―ヒロシマ・ナガサキの人類史的意味
◆第Ⅵ部　ヒロシマ・ナガサキからチェルノブイリ・フクシマへ

資料❹　戦争に至る日本と世界 年表

1894年8月　日清戦争

1902年1月　日英同盟
1904年2月　日露戦争
1905年9月　日比谷焼き討ち事件
1909年5月　新聞紙法施行
1910年8月　日本、韓国を併合
1911年10月　辛亥革命
1912年1月　中華民国成立
1912年1月　明治天皇崩御、大正天皇即位
1914年7月　第一次世界大戦開始（～1918年11月）
1915年1月　日本、中国へ21か条の要求
1918年8月　日本軍、シベリア出兵
1919年1月　パリ講和会議
1919年5月　中国で反日運動起こる（五・四運動）
1920年1月　国際連盟発足
1921年11月　ワシントン軍縮会議（～1922年6月）
1921年12月　四カ国条約（日･米･英･仏）
1923年9月　関東大震災
1924年1月　中国、第一次国共合作
1925年1月　ラジオ放送開始
1925年5月　普通選挙法、治安維持法施行
1926年12月　大正天皇崩御、昭和天皇即位
1927年4月　田中義一内閣成立（～1929年7月）
1927年5月　日本軍、第一次山東出兵
1928年2月　第一回普通選挙
1928年5月　済南事件
1928年6月　張作霖爆殺事件
1929年7月　浜口雄幸内閣成立（～1931年4月）
1929年10月　世界大恐慌
1930年4月　ロンドン海軍軍縮会議
1931年4月　第二次若槻礼次郎内閣成立（～1931年12月）
1931年6月　中村大尉事件
1931年9月　柳条湖事件、満州事変勃発
　　中国国際連盟へ提訴
　　国際連盟理事会、日本に対する満州からの軍の撤兵要請を採択
1931年12月　犬養毅内閣成立（～1932年5月）
1932年1月　第一次上海事変
1932年3月　満州国建国宣言
　　リットン調査団、柳条湖事件の調査開始
1932年5月　五･一五事件、犬養毅首相が殺害される
　　斎藤実内閣成立（～1934年7月）
1932年9月　リットン調査団、国際連盟に報告書を提出
1933年1月　日本軍熱河に侵入
1933年2月　国際連盟特別総会、リットン報告書に基づき、日本への満州撤退勧告を採択
　　日本首席全権松岡洋右、勧告の受託拒否を表明
1933年3月　日本、国際連盟脱退
1933年5月　日中で塘沽停戦協定成立
1934年7月　岡田啓介内閣成立（～1936年3月）
1934年10月　中国共産党、長征開始
1934年12月　日本、ワシントン海軍軍縮条約とロンドン海軍軍縮条約を破棄
1935年2月　天皇機関説問題起こる
1935年8月　永田鉄山が殺害される
1936年2月　二･二六事件、斎藤実内大臣、高橋是清蔵相らが殺害される
1936年3月　広田弘毅内閣成立（～1937年2月）
1936年11月　日独伊防共協定成立
1936年12月　西安事件
1937年2月　林銑十郎内閣成立（～1937年6月）
1937年6月　第一次近衛文麿内閣成立（～1939年1月）
1937年7月　盧溝橋事件、日中戦争勃発
1937年8月　日本軍、北京占領。第二次上海事変
1937年9月　中国、第二次国共合作
1937年11月　日本軍、上海占領
1937年12月　日本軍、南京占領
1938年5月　国家総動員法施行、日本軍、徐州占領
1938年7月　張鼓峰事件
1938年10月　日本軍、武漢三鎮占領
1938年12月　日本軍、重慶爆撃開始
1939年1月　平沼騏一郎内閣成立（～1939年8月）
1939年5月　ノモンハン事件
1939年8月　独ソ不可侵条約締結。
　　阿部信行感覚成立（～1940年1月）
1939年9月　ドイツがポーランドに侵攻
　　イギリス･フランスがドイツに宣戦布告
　　第2次世界大戦勃発
1940年1月　米内光政内閣成立（～1941年7月）
1940年5月　日本軍、宜昌占領
1940年7月　第二次近衛文麿内閣成立（～1941年7月）
1940年9月　日本軍北部仏印進駐
　　日独伊軍事同盟締結
1940年10月　大政翼賛会発足
1941年4月　日ソ中立条約成立
　　日米交渉開始
1941年6月　独ソ戦開始
1941年7月　第三次近衛文麿内閣成立（～1941年10月）
　　日本軍南部仏印進駐
　　アメリカ、日本の資産を凍結
1941年8月　アメリカ、日本への石油輸出をストップ
1941年10月　東條英機内閣成立（1944年7月）
1941年11月　アメリカ、日本に春。ノートを提出
1941年12月　日本時間8日未明、日本軍が真珠湾を攻撃。
　　太平洋戦争開始

（以上「日本人はなぜ戦争への向かったのか」関連年表より
NHK取材班 編著 「「日本人はなぜ戦争への向かったか」下
NHK出版）

日中戦争・太平洋戦争関連地図

11　オピニオン　13版S　2025年（令和7年）10月1日（水）

オピニオン＆フォーラム

戦争支持の底流

インタビュー

男らしさ女らしさ　瓦解にいら立ち
「国防」用いて批判

戦後80年、多くの歴史が語られてきた。ただ、大切な問いは、実はまだ十分に議論されていないのではないか。いま問われるべきは、なぜ、当時の人々があれほど熱心に戦争を支持したのかの解明ではないか――。そんな思いで、日本の外から日本近現代史を研究する歴史家、益田肇さんに聞いた。

歴史家　益田（ますだ）肇（はじめ）さん

1975年生まれ。シンガポール国立大准教授。日本近現代史、20世紀アジア史。著書「人びとのなかの冷戦世界」で大佛次郎論壇賞。近著に「人びとの社会戦争」。

受け身の犠牲者？　言霊がつくる国論
どの社会・時代も

[illegible]

＊今回の映画会のテーマ「日本人はなぜ戦争へと向かったのか」及びその「映像を見て考えたいこと」と重なるところがあると思い、**「人々の社会戦争　日本はなぜ戦争への道を歩んだのか」**の著者**益田肇**さんの、朝日新聞2025年10月1日の「オピニオン＆フォーラム」の記事を紹介させていただきます。

人々の社会戦争　日本はなぜ戦争への道を歩んだのか
益田肇　著
2025年9月刊岩波書店
近代化を成し遂げた大正期以降、解放と引締めをめぐる「戦い」が、人びとの日常のなかで激化し、ついには本当の戦争へと至るまでを描く。軍部が起こした戦争に巻き込まれた国民という視点からは抜け落ちる、人びとの「社会戦争」のダイナミズムから近現代日本の実像を追う。大佛次郎論壇賞、毎日出版文化賞受賞者の渾身の大作。

資料❻　「映像の世紀」シリーズについて（バックナンバー一覧）

＊**「映像の世紀」シリーズ**は、1995年3月以来、30年にわたって放映されてきたドキュメンタリーシリーズです。
　はじめて映画･映像が出現した「20世紀」を主に記録フィルムやニュース映像をもとに編集されたものです。
　150作品を超えるそのタイトルを見ていきますと、シリーズによって取りあげる素材や事件、人物（主に政治家）は違っても、一貫して「戦争」とは何だったのか、それを残された映像によって伝えていく、あるいは解明していくというこだわりがあると思います。
　題名からその内容をホームページでもっと詳しく知ることができます。
　これから戦争についてあるいは「戦争の放棄」を掲げた憲法について改めて考えていくとき、知識だけでなくイメージとしてもとらえることができ琉貴重な教材です。

【映像の世紀 】

第1集　**20世紀の幕開け**
　～カメラは歴史の断片をとらえ始めた～
　1995年3月25日
第2集　**大量殺戮の完成**
　～塹壕の兵士たちはすさまじい兵器の出現を見た～
　1995年4月15日
第3集　**それはマンハッタンから始まった**
　～噴き出した大衆社会の欲望が時代を動かした～
　1995年5月20日
第4集　**ヒトラーの野望**
　～人々は民族の復興を掲げたナチス・ドイツに未来を託した～
　1995年5月20日
第5集　**世界は地獄を見た**
　～無差別爆撃、ホロコースト、そして 原爆～
　1995年6月17日
第6集　**独立の旗の下に**
　～祖国統一に向けて、アジアは苦難の道を歩んだ～
　1995年7月15日
第7集　**勝者の世界分割**
　～東西の冷戦はヤルタ会談から始まった～
　1995年9月16日
第8集　**恐怖の中の平和**
　～東西の首脳は最終兵器・核を背負って対峙した～
　1995年10月21日
第9集　**ベトナムの衝撃**
　～アメリカ社会が揺らぎ始めた～
　1995年11月18日
第10集　**民族の悲劇果てしなく**
　～絶え間ない戦火、さまよう民の慟哭があった～
　1995年5月20日
第11集　**JAPAN～世界が見た明治・大正・昭和～**
　1995年5月20日
別巻　歴史の舞台を廻る

【新･映像の世紀】

第1集　百年の悲劇はここから始まった　**第一次世界大戦**
　2015年10月25日
第2集　グレートファミリー 新たな支配者
　超大国アメリカの出現
　2015年11月29日
第3集　時代は独裁者を求めた　**第二次世界大戦**
　2015年12月20日
第4集　世界は秘密と嘘に覆われた　**冷戦**
　2016年1月24日
第5集　若者の反乱が世界に連鎖した　**激動の1960年代**
　2016年2月21日
第6集　あなたのワンカットが世界を変える **20世紀の潮流**
　2016年3月20日

【映像の世紀プレミアム】

第1集　**世界を震わせた芸術家たち**　2016年5月28日
第2集　**戦争 科学者たちの罪と勇気**　2016年8月13日
第3集　**世界を変えた女たち**　2016年12月3日
第4集　**英雄たちの栄光と悲劇**　2017年3月18日
第5集　**グレートファミリー 巨大財閥の100年**
　2017年6月10日
第6集　**アジア 自由への戦い**　2017年8月19日
第7集　**極限への挑戦者たち**　2017年12月16日
第8集　**アメリカ　自由の国の秘密と嘘**　2018年2月10日
第9集　**独裁者 3人の“狂気”**　2018年6月16日
第10集　**難民 希望への旅路**　2018年8月11日
第11集　**運命の3つの都 パリ・ベルリン・ニューヨーク**
　2018年12月8日
第12集　**昭和 激動の宰相たち**　2019年3月9日
第13集　**戦場の黙示録**　2019年6月22日

第14集　**運命の恋人たち**　2019年11月30日
第15集　**東京 夢と幻想の1964**　2020年1月3日
第16集　**オリンピック 激動の祭典**　2020年６月20日
第17集　**人類の危機**　2020年9月19日
第18集　**ナチス 狂気の集団**　2021年4月3日
第19集　**東京 破壊と創造の150年**　2021年3月29日
第20集　**中国 “革命”の血と涙**　2021年8月14日
第21集　**太平洋戦争 銃後もうひとつの戦場**
　2021年12月4日

【映像の世紀 バタフライエフェクト（１）】

2022年度
第1回　**モハメド・アリ 勇気の連鎖**
第2回　**アインシュタイン**　科学者たちの罪と勇気
第3回　**ベルリンの壁崩壊** 宰相メルケルの誕生
第4回　**スペイン風邪** 恐怖の連鎖
第5回　**ヴェルヴェットの奇跡** 革命家とロックシンガー
第6回　**宇宙への挑戦** 夢と悪夢 天才たちの頭脳戦
第7回　**スターリンとプーチン**
第8回　**我が心のテレサ・テン**
第9回　**ヒトラーVSチャップリン** 終わりなき闘い
第10回　**砂漠の英雄と百年の悲劇**
第11回　**キューバ危機** 世界が最も核戦争に近づいた日
第12回　**RBG 最強と呼ばれた女性判事**
　女性たち 百年のリレー
第13回　**太平洋戦争 “言葉”で戦った男たち**
第14回　**難民 命を救う闘い**
第15回　**中国 女たちの愛と野望**
第16回　**東京 破壊と創造　関東大震災と東京大空襲**
第17回　**映像プロパガンダ戦** 嘘と嘘の激突
第18回　**9.11 同時多発テロへの点と線**
第19回　**ルーズベルトVSリンドバーグ**
　大戦前夜 アメリカは参戦すべきか
第20回　**ひとつの友情がアメリカを変えた**
第21回　**ジェノサイド** 虐殺と黙殺
第22回　**大恐慌** 欲望と破滅の1929年
第23回　**ソ連崩壊** ゴルバチョフとロックシンガー
第24回　**世界を変えた“愚か者” フラーとジョブズ**
第25回　**ナチハンター** 「忘却」との闘い
第26回　**戦場の女たち**
第27回　**ロックが壊した冷戦の壁**
第28回　**危機の中の勇気**
第29回　**零戦** その後の敗者の戦い
第30回　**ブルース・リー**　友よ 水になれ
第31回　**朝鮮戦争** そして核がばらまかれた
第32回　**大統領が恐れたFBI長官**
第33回　**運命の恋人たち**

資料❻　「映像の世紀」シリーズについて（バックナンバー一覧）

【映像の世紀 バタフライエフェクト（2）】

2023年度
第34回　**戦争の中の芸術家**
第35回　**満州帝国** 実験国家の夢と幻
第36回　**ベルリン 戦後ゼロ年**
第37回　**大東亜共栄圏の3年8か月**
第38回　**ハリウッド 夢と狂気の映画の都**
第39回　**独ソ戦 地獄の戦場**
第40回　**ベトナム戦争 マクナマラの誤謬**
第41回　**ビートルズの革命 赤の時代**
『のっぽのサリー』が起こした奇跡
第42回　**ビートルズの革命 青の時代**
そしてルーシーは宇宙を行く
第43回　**チャーチルVSヒトラー**
第44回　**JFKをつくった3人のケネディ**
第45回　**GHQの6年8か月**
マッカーサーの野望と挫折
第46回　**プーチンとゼレンスキー**
ロシアとウクライナの100年
第47回　**関東大震災復興から太平洋戦争への18年**
第48回　**9.11が変えた世界** 運命の3人
第49回　**竹のカーテンの向こう側**
外国人記者が見た激動中国
第50回　**巨大工事 世界はどうつながってきたのか**
第51回　**地球破壊** 人類百年の罪と罰
第52回　**イギリス王室の百年** 大英帝国の栄光と贖罪
第53回　**パリは燃えているか**
第54回　**田中角栄** 列島改造の夢と転落
第55回　**エベレスト** 栄光と狂気
第56回　**塩の行進 ガンジーの志を継ぐ者たち**
第57回　**ビートルズとロックの革命**
第58回　**ふたつの超大国** 米中の百年
第59回　**石油 世界を動かした“血”の百年**
第60回　**世界が揺れたふたつの年** 1968年と1989年
第61回　**マンハッタン計画** オッペンハイマーの栄光と罪
第62回　**CIA 世界を変えた秘密工作**
第63回　**イスラエル**
第64回　**ロシア 暗殺と粛清**

2024年度
第65回　映像記録 **東京裁判**
第66回　**巨大事故 夢と安全のジレンマ**
第67回　**史上最大の作戦 ノルマンディー上陸**
第68回　**奇妙な果実 怒りと悲しみのバトン**
第69回　**カラシニコフ銃1億丁** 史上最悪の殺人兵器
第70回　**安保闘争** 燃え盛った政治の季節
第71回　**ルート66** アメリカの夢と絶望を運んだ道
第72回　**香港 百年のカオス** 借り物の場所 借り物の時間
第73回　**ワイマール ヒトラーを生んだ自由の国**
第74回　**東京 戦後ゼロ年**
第75回　**オリンピック 聖火と戦火**
第76回　**太平洋戦争 日米プロパガンダ戦**
第77回　**ゲッベルス 狂気と熱狂の扇動者**
第78回　**9.11 あの日が変えた私の人生**
第79回　**I DON’T LIKE MONDAYS 月曜日の物語**
第80回　**壁 世界を分断するもの**
第81回　**バブル ふたりのカリスマ経営者**
第82回　**ふたつの敗戦国 ドイツ さまよえる人々**
第83回　**ふたつの敗戦国 日本 660万人の孤独**
第84回　**吉田茂 占領下のワンマン宰相**
第85回　**毛沢東 革命と独裁**
第86回　**ラストベルト アメリカ 忘れられた人々**
第87回　**ナチ親衛隊 狂気の実行者たち**
第88回　**戦後日本の設計者 3人の宰相**
第89回　**戦争のトラウマ** 兵士たちの消えない悪夢
第90回　**ベトナム 勝利の代償**
第91回　**ラストエンペラー 溥儀** 財宝と流転の人生
第92回　**麻薬 世界を狂わせた欲望**
第93回　**死の大地 ドイツ敗走の2200キロ**
第94回　**映像の世紀×AI ヒトラーの隠された素顔に迫る**

2025年度
第95回　**東ドイツ 監視国家 41年の闇**
第96回　**シークレットサービス** 大統領の盾となる者たち
第97回　**アウシュビッツの生還者たち**
第98回　**”神の国” アメリカ** もうひとつの顔
第99回　**AI 未来を夢みたふたりの天才**
第100回　シリーズ 核の80年（1）**核拡散 恐怖と不信の連鎖**
第101回　シリーズ 核の80年（2）
ヒロシマ 世界を動かした2人の少女
第102回　**世界を変えた巨大災害**
第103回　激動 アジアの隣人たち **韓国 戒厳令との闘い**
第104回　激動 アジアの隣人たち **台湾 130年の傷痕**
第105回　**移動するアメリカ 夢と絶望の地図**
第106回　シリーズ昭和百年（1）　**戦時下の宰相たち**
第107回　シリーズ昭和百年（2）　**敗戦国ニッポン**
敗れざる者たち
第108回　シリーズ昭和百年（3）　**高度成長**
やがて悲しき奇跡かな
第109回　**9.11 ラストボイス**
第110回　**ナチを支えた女性たち**
第111回　**ニューヨーク・ニューヨーク**
第112回　**ロシア革命、世界を覆ったユートピア幻想**
第113回　**銀座 百年の記憶**
第114回　**昭和の文豪たち**
第115回　**アメリカと中東 終わりなき流血**
第116回　**アメリカ 日系人部隊 栄光の代償**
第117回　スクリーンの中の東京百年
第118回　**レンズの向こうの戦争**
ジャーナリスト 沈黙との闘い
第119回　**"沖縄 愛と悲しみの女性たち**
第120回　**人間国宝 女形に生きた男たち**

出典：ウィキペディア(Wikipedia)
「映像の世紀」「新・映像の世紀」
「映像の世紀 プレミアム」
「映像の世紀バタフライエフェクト」

資料❼　第85回 憲法を考える映画の会（2025/12/07）報告および参加者感想から（１）

「第85回憲法を考える映画の会」は、2025年12月7日文京区民センター3A会議室で行われました。

上映プログラムは、太平洋戦争開戦日の1941年（昭和16年）12月8日、北海道大学の学生宮沢弘幸さんと、米国人英語教師ハロルド・レーンさん夫妻らが「軍機保護法」違反などの疑いで逮捕され、それぞれ懲役12年から15年の刑を受けた事件を描いた『**レーン・宮沢事件**』です。

7月の参議院議員選挙以降、持ち上がった「スパイ防止法」制定の動きについて、この戦前･戦中の言論弾圧の根拠となった「軍機保護法」から考えて見たいと企画しました。

この映画制作の背景を製作に当たったビデオプレスの松原明さんにお話しいただき､併せて参考上映として、宮沢弘幸さんの妹さんに取材したNHK番組『**兄はスパイじゃない**』を上映、さらにスライドで伊藤真さんの「塾長雑感『スパイ防止法と立憲主義』を見て「スパイ防止法」の危険について認識を深めました。

【トークシェアで話し合われたこと（概要）】

■（松原明さんのお話）ここに集まったみなさんも時代の危機感を感じられて来ていることと思う。この映画は30年前の作品だが、こう言う作品がまた見られると言うことは、いいようでまたどうなのかとも感じる。改めてじっくり見たが､同じような構造がまた繰り返されていることをひしひしと感じた。（他、この映画が作られたきっかけ、制作中のことを話された。また宮澤さんが語った「僕の唯一の罪は外の世界を知ろうとして外国人と仲が良かったことだ」というくだりを読み上げられた。この事件を伝える映像が残ったことは嬉しいし拡げていきたいと話された。）

■（女性）北大のことは映画には出てこなかったが、北大は何かしら対応しているのだろうか？

■（男性）自分は60年前に北大を卒業したのだが、この事件のことは、2013年頃まで全然知らなかった。北大では戦後すぐイールズ事件というあって､GHQのイールズという人が､また戦争のできる国にするんだと講演する事件があって、北大はそれに抵抗し、ストップさせた。学生運動はずーっと北大の中でも続いたが、そう言うことをやった人間でも（レーン･宮沢事件のことは）知らなかった。レーンさんが51年に来られて私が最後の授業を受けた世代になるが、レーン先生は全然そう言うこともおっしゃらなかった。北大では、宮沢さんとレーンさんが拘束されたときにお母さんが大学に来て、「何とかしてください」とお願いしたのだが、北大は一切知らないと。本人に退学届を出させて北大は関係ないと。

戦後われわれが運動を始めて、宮沢･レーン事件という事件があったことを世の中に残しておきたいといった時もノー回答だった。唯一、宮沢賞、レーン賞というのを作って英語ができる人に賞を与えるということはできた。われわれは今、校内の外国人宿舎の跡地にこう言う事件があったという石碑を建てさせてほしいということを要請しているが、大学もこの時勢、文部省の言いなり、規制もあって「ノー」という返事しか返ってきていません。

（参考上映と伊藤真さんのスライドの後）

■北海道は旭川の生活図画事件や三浦綾子の『銃口』に書かれた綴り方教育事件などなど北海道の治安維持法事件が多いが、何か地域性があるのだろうか。

■（女性）昨日たまたま芸大の川嶋均先生に生活図画事件の話を聞いた。来年、生活図画事件の本を出す準備中とのこと。これも証拠が燃やされてしまって、うやむやにされていることが多い事件だが、やはり当時の警察が成果を上げるため、誰彼かまわず検挙していったということだった。

■（松原さん）「レーン宮沢事件」の映画も朝日新聞記者の藪下庄一郎さんがこの事件を知らしめた。やはりジャーナリズムの役割が大きい。ところが今、ジャーナリズムはほとんど抑えこまれている。とくに安倍政権はメディア対策に力を入れていて安倍×菅×今井のラインで徹底して行われた。
各局、各メディアの幹部と食事を重ね、現場に脅しを掛ける。それを今、高市が同じメンバーで同じようにやっていて、そうとう厳しい状況だ。

国家秘密法は、中曽根政権の時に廃案になったがその時は自民党内にも戦争を知っている人、ちゃんと戦争観を持っている人がいて反対したが、今はそうした人は誰もいない。

【参加票に寄せられた感想など（１）】

●なかなか観られない映画をありがとうございました。
今の情勢にピッタリの映画でした。
会の皆様に感謝いたします。(K.Y.)

●以前「レーン宮沢事件」のスタディツァーに参加し、地元の有志の方々に北大など案内して頂きました。資料室も見学しました。（写真等）またスパイ防止法学習会の院内集会にも参加しましたが私達は受け身にならざるを得ないと思いました。
こちらが動けばそれに対して政策を変え、厳罰化してゆくことでしょう。隣人同志監視し、密告しあうことの恐ろしさ。どうすればよいのか、どう動けばよいのか。
署名？チラシ？声をあげていくだけで、これを止められるのか？不安です。でも、だからこそ一人一人、というより私自身はそれでも声をあげ続けたいと思います。
見たい映画「ニッポニア日本」。タイトル忘れましたが福島の知事佐藤栄佐久知事が辞任に追い込まれた映画（註：『「知事抹殺」』の真実）がみたいです。(K.Y.)

●ありがとうございました。
今の情勢のこわさを感じました。(H.H.)

●この事件を知りませんでしたので、勉強になりました。スパイ防止法によってこういうえん罪事件がふえるかもしれません。右派政権で、新しい戦前になるのかもしれません。
(S.Y.)

資料❸　第86回 憲法を考える映画の会（2025/12/07）参加者感想から（1）

●ありがとうございました。(M.E.)

●勉強させていただき感謝です。
教育もおかしなことになっているし、子どもたちのいきづらさが益々な最近、親として何が出来るのか、模索中です。
又、学ばせてください。
ありがとうございました。(U.H.)

●悲惨さ、危険なことは良くわかるが人間関係が良くわからない。ナレーターの声ははっきり日本語の内容がわかるが出演者の言葉が不明瞭で全容を把握できない。
本なら前に戻ったり出来るが映画を作った人は全て把握しているから色々言えるが、全容がわからない、この映画を観た私個人には理解出来ない。
松原さんのご活躍には感謝し、応援したい。(F.O.)

●スパイ防止法だの共謀罪法だの特定秘密保護法だの、人権ふみにじりの治安法が支持を集める最大の理由は、日本人の「変わらない」臣民意識であり、主体性を形成できない社会的みじゅくにあります。頂点盲従、同調圧力、無責任が同居しています。(I.T.)
●大切なテーマの上映会ありがとうございます。
この映画のことも広めていかなければと思います。(M.M.)

●映画はもちろん、NHK地方発ドキュメンタリー「兄はスパイじゃない」がとても良かったです。２つの作品を観ることで、理解がさらに深まりました。
12月８日を前に、タイムリーな企画でした。(T.Y.)

●旧日本軍は記録を燃やしてしまったから、闇にほうむられた出来事（事件）がいくつもあるんでしょうね。
まさに氷山の一角ですね。
会場内、私も含めて年配者が多いですね。
若い人に来て欲しいです。(E.O.)

●いつも勉強になります。
宮沢レーン事件ははじめて知りました。
開催のお知らせをもう少し早く頂戴できると助かります。
手元資料３Pの、宮沢さんの生年月日だと、平安時代の生まれになってしまいますよ（笑）（N.K.）

●映画では、宮沢さんやレーンさんを護る一般の人々がどれほど存在していたのか、それがとても気がかりです。しかし、連作として観たことで、歴史の深さを感じられ良かったです。
と申しますのも、現在、「外国人政策反対」の排外主義のデモがあからさまに起こっており、しかも、一般のデモの参加者が、「コミュニティを作るな」と、外国人のコミュニケーションの妨害を買って出ている様子（東京新聞より）なのです。
何とか、一般の特にここに参加していなかった若者世代の「排外主義の感覚」が沈静して行って欲しいと思います。
次回も、何としても参加します。(Y.K)

●北大生がスパイ扱いされたという話しは知ってましたが、今日の上映でようやく内実の一端を知ることができました。
まず、知ることができて、ありがとうございました。今の自分達の問題として、仲間たちに伝えます。
好奇心・向学心のある学生が大学にすぐに復学願を出し、受理した映像をみて、とても切なくなった。（NHKドキュメントから）人生を変えられ、生命まで奪う法律とは、非常に危険だ。(H.N.)

●どちらも以前に見たことがあります。
えん罪事件です。一般市民がスパイと疑われる。一度警さつに捕ったら、無罪になるまで、何１０年もかかる。美江子さんは、おっしゃっている通り、人生を狂わされてしまった。
北海道大学が、宮沢賞を設立してくれるところまで実現したので、美江子さんの努力が実を結んでよかったです。(M.S.)

●今回の開催をメールで知らせていただけたので参加できました。今後も連絡をお願いします。今の世の中に危機感をもっています。(E.Y.)

●共謀罪法、特定秘密保護法、安保法制などと経済安保法やスパイ防止法などを次々と立法化して、それらをさまざまに組み合わせて運用していくことで、自民党を中心とする右翼与党政党の意のままにこの国を変えていく企てが、あらためてよく理解できる勉強会でした。自民＋維新＋参政党＋保守党などが主張する外国人政策の悪政が今後はびこるようなら、この国の危機的状況はますます深まっていくだろう。
先日生まれてきた私の初孫のためにも、なんとか世界平和と人類存続を願い、私自身もそのための努力をしたい。(E.S.)

●「レーン宮沢事件」は初めて拝見しました。ありがとうございました。
戦争と人権は相入れない。
人権尊重の社会を守り、育てる国にすべきです。
国立の人権（平和、健康）委員会、研究所、資料館等を政府から独立した機関として設立、運営すべきでしょう。(H.M.)

●今日、映画とNHKの映像、松原さんの話、超充実した配布資料ですごく勉強になった。来てよかった!!
社会が平和で安定するためにはインテリを含めた中流階級が重要と聞いたことがあるけど宮沢さんはまさにそれに当てはまるインテリ中流階級だったために狙われた側面もあるのかなと思った。
戦争に向かう危険な流れにあらがうために一人ひとりがそれに負けずに学んでいかなければと思う。(E.A.)

●本日は、良い映画をありがとうございました。友人にさそわれて知りましたが来て良かったです。
•北海道旅行をしてきたばかりですが、小樽商科大学や小樽文学館をみてきました。北方の特高についての荻野富士夫氏の研究をもっと知らなければと思いました。
•今月21日に、荻野氏を立川の「市民のひろば・憲法の会」でおよびして、不戦のつどいの講演会をします。本日の映画会が参加者多数なのを拝見して、皆さんの危キ感をひしひしと感じました。(T.A.)

●この映画の会に来て、後悔した事がありません。今の若者が宮沢さんにだぶります。恐ろしさが迫ってきます。(K.Y.)

憲法映画祭2026
(第87回憲法を考える映画の会)

日時：2026年4月18日（土）10時～
会場：文京シビックホール小ホール（2階）

毎年、憲法記念日の前の休みの日に開催してきた「憲法映画祭」ですが、今年は10回目になります。
しかし、昨年までホームグラウンドのようにしてきた吉祥寺駅南口武蔵野公会堂は今年、来年と改装工事に入るので、今年は会場を改め、**文京シビックホール小ホール**（341席）で開催します。

現在プログラムを検討している所ですが、次のような作品が候補に挙がっています。
『二十四の瞳』『ラスト・メッセージ』『医の倫理と戦争』『百姓の百の声』『ありふれたファシズム』…
2 月半ばには、プログラムを決めてご案内できると思いますので、どうぞ紹介よろしくお願いします。

「憲法を考える映画のリスト2026」を制作します

上記の「憲法映画祭2026」（4月18日）に向けて、「憲法を考える映画のリスト2026年版」を作ります。

これまで「憲法を考える映画の会」上映してきた作品を中心に、憲法や民主主義、人権、戦争や核の問題について考える映画･映像をリストにします。
誰もが「自主上映会」を開いたり、学習会で活用できるように、「どこで借りられるか」「上映料はどの位か」が分かるようにしたリストです。

郵送で「憲法を考える映画の会」の案内をご希望の方へ

「憲法を考える映画の会」は、2ヶ月に1回のペースで上映会を行っていますが、ご希望の方にメールと郵送でご案内させていただいております。
次回、2026年4月から1年間の上映会の案内を郵送でご希望される方には、年間（6回の上映会）1000円の郵送費のご協力をお願いします。

郵送での案内（2026年度分）をご希望の方は、

■郵便振込の場合
払込取扱票」に住所をご記入の上
「口座記号･番号00170-2-729555憲法を考える映画の会」に郵便局窓口から送金ください。

■会場での受付の場合
上映会場で「上映会参加票」に住所をご記入の上、
受付で1000円をお渡しください。

メールでのご案内（無料）をご希望の方は、
■上映会場で「参加票」に、メールアドレスをご記入ください。
■メールからの申込み：メールアドレス（hanaski33@me.com）に申込みください。

＊上映会活動に対するカンパも歓迎します。宜しくお願いします。

上映会・催しの案内

２月７日（土）～11日（水･休）　第17回座・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル
2月9日（月）10時『**ロッコク・キッチン**』13時15分『**ラーメンヘッズ**』16時『**ノー・アザー・ランド 故郷は他にない**』19時『**子どもたちはもう遊ばない**』

2月10日（火）10時「コンペティション部門」
19時～『**日本の悲劇**』

2月11日（水・休）10時「**小学校 ～それは小さな社会～**」12時40分『**黒川の女たち**』15時半『**名付けようのない踊り**』18時40分「**MONTEREY POP モンタレー・ポップ**」（座･高円寺＝高円寺駅）

２月11日（水･休）13時20分～　「建国記念の日」反対 2026年2.11集会「憲法80年 軍拡・改憲を許さず平和な世界と日本へ」（林野会館＝茗荷谷駅）

２月14日（土）14時半～･18時半～　水俣病70年 環東京連続講演会（1月～3月 全8回）第4回：中島岳志さん講演＋映画『水俣病－その20年』（立川市女性総合センター＝立川駅）

２月14日（土）13時半～　横浜キネマ倶楽部：第87回上映会 『**マイライフ・アズ・ア・ドッグ**』（横浜市南公会堂＝市営地下鉄「阪東橋」）

２月14日（土）13時半～　調布九条の会「憲法ひろば」台湾問題は日中間の基本文書でどう語られてきたか～国共内戦の「化石」化が中台両岸民衆の願い　内田雅敏さん（あくろすホール＝国領駅）

２月14日（土）14時半･18時半～　水俣病70年 環東京連続講演会（1月～3月 全8回）第4回：中島岳志さん講演＋映画『**水俣病－その20年**』（立川市女性総合センター＝立川駅）

２月14日（土）13時半～　横浜キネマ倶楽部：第87回上映会 『**マイライフ・アズ・ア・ドッグ**』（横浜市南公会堂＝市営地下鉄「阪東橋」）

2月20日(金)18時～　「えん罪･再審(やり直し裁判)の法改正を！大署名キックオフ市民集会～鎌田慧、鴨志田祐美、袴田ひで子、前川彰司、石川早智子、金平茂紀、神田香織、周防正行さんらスピーチ」（カトリック イグナチオ教会･ヨセフホール＝JR四谷駅麹町口上智大手前）

2月21日（土）14時～　石橋学さん講演会「『日本人ファースト』を取材現場から考える」浦和コミセン13集会室=浦和駅）

2月21日（土）13時半～　安田浩一さん講演会「差別と排外主義の現場を取材して」浦和コミセン14集会室=浦和駅）

2月22日（日）14時～　1967年10月8日羽田闘争の衝撃！**「市街戦のジャズメン　作家佐藤泰志の衝撃」**上映会（文京区民センター＝後楽園駅･春日駅）

2月22日（日）14時～　公開講演会「詩人尹東柱（ユン・ドンジュ）とともに・2026～尹東柱の詩にみる共感の諸相」（2/22 14:00～ 東京・立教学院）